

天理市埋蔵文化財発掘調査概要報告

1990年度

三軒塚古墳
西ノ山古墳・成願寺遺跡
長寺遺跡（第4次）

1991年

天理市教育委員会

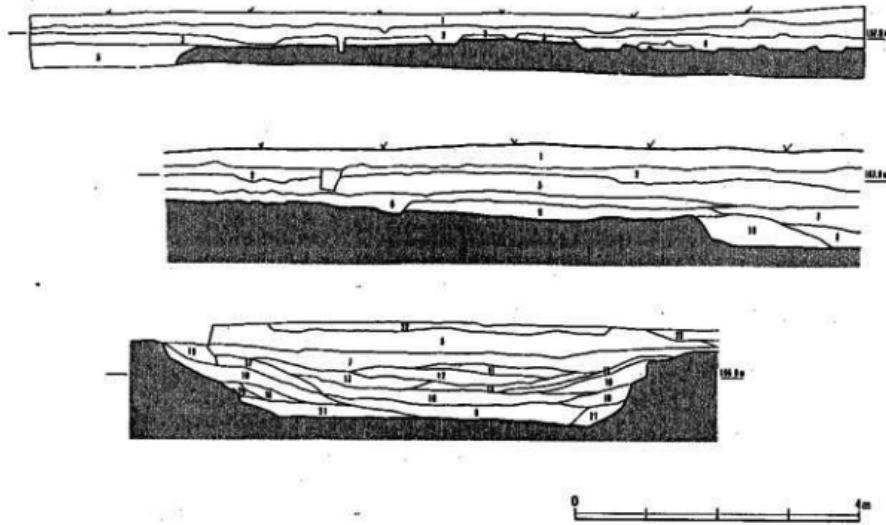
『天理市埋蔵文化財発掘調査概要報告』1990年度 正誤表

記号

正誤

18ページ16行目 ヨコナデ仕上げでおり、 → ヨコナデで仕上げており、
18ページ20行目 弥生後期半頃 → 弥生後期後半頃

23ページ第17図 写植ミスがありましたので訂正します。土層図の番号は以下の
図のとおりです。



序 文

本市は、豊かな自然と、数多くの文化遺産に恵まれた土地であります。年々増加する埋蔵文化財の発掘調査は、私達に歴史を解き明かす手掛かりを与え、また郷土の歴史を語るうえで貴重な資料を提供してくれます。この誇るべき郷土の文化遺産を積極的に保存・活用してゆくのが私達に課せられた使命と考えております。

本書は、平成2年度に、国庫補助事業として実施しました発掘調査の概要です。多くの方々に活用していただけたら幸いに存じます。

最後に調査の実施にあたり、ご協力いただいた関係者各位に深く感謝いたします。

平成3年3月

天理市教育委員会

教育長 上司 幸男

例　　言

1. 本書は、天理市教育委員会が平成2年度国庫補助事業として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、天理市教育委員会社会教育課文化財係が実施し、同係技術員松本洋明・青木勘時が現地調査を担当した。
3. 本書の調査地および調査期間は次のとおりである。

三軒塚古墳　天理市乙木町 287・288 番地　平成2年8月2日～8月20日

西ノ山古墳　天理市萱生町 1066 番地　平成2年11月19日～平成3年1月31日
長寺遺跡（第4次）　天理市櫻本町 2053－2 番地 他 平成2年6月12日～7月31日

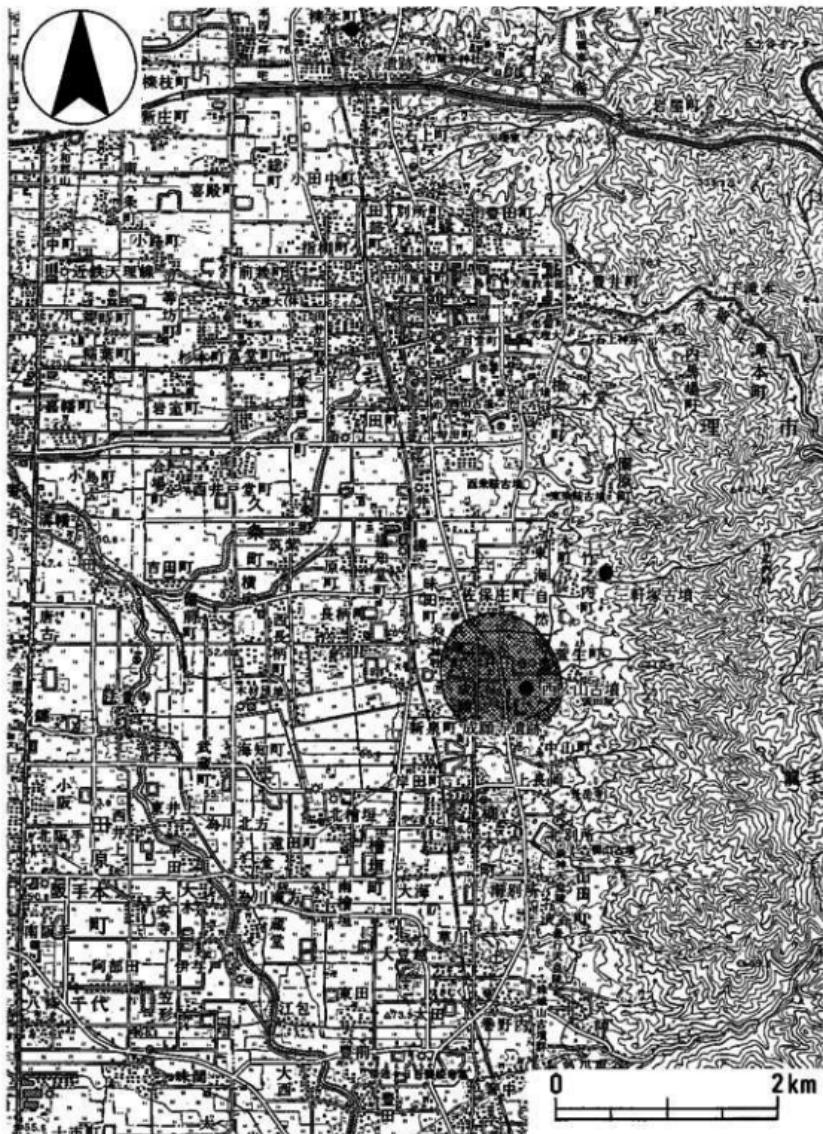
4. 平成2年度の国庫補助事業による調査は、本書に掲載した三軒塚古墳、西ノ山古墳、長寺遺跡の他に赤土山古墳（第3次）の調査を実施しているが、これについては別に概要報告書を作成した。
5. 現地調査から遺物整理、本書作成にいたるまで下記の方々の御助力を得た。記して謝意を表する（敬称略・順不同）。

小池香津江・伊藤恵理子・前田雪恵・酒井祐介（奈良大学）、西山陽子・豊田真由美（堺女子短期大学）、小野耕造・矢田秀樹・松宮しのぶ（天理大学）

6. 現地調査および出土遺物について、下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である（敬称略・順不同）。
7. 本書の編集は青木勘時が担当し、また、執筆は松本・青木・小池がおこない、目次に執筆分担を明記した。

目 次

序文.....	(上司幸男)
I 三軒塚古墳の調査.....	(青木) 2
1 はじめに.....	2
2 調査の概要.....	3
(1)調査の方法と経過.....	3
(2)層序.....	3
(3)出土遺物.....	4
3まとめ.....	5
II 西ノ山古墳・成願寺遺跡の調査.....	(青木) 6
1 はじめに.....	6
2 調査の概要.....	8
(1)調査の方法と経過.....	8
(2)層序.....	8
(3)上層遺構面（成願寺遺跡）.....	12
(4)西ノ山古墳周辺.....	14
(5)出土遺物.....	(青木・小池) 18
3まとめ.....	20
III 長寺遺跡（第4次）の調査.....	(松本) 22
1 はじめに.....	22
2 調査の概要.....	23
(1)調査の契機.....	23
(2)基本土層.....	23
(3)造構と遺物.....	24
3まとめ.....	27



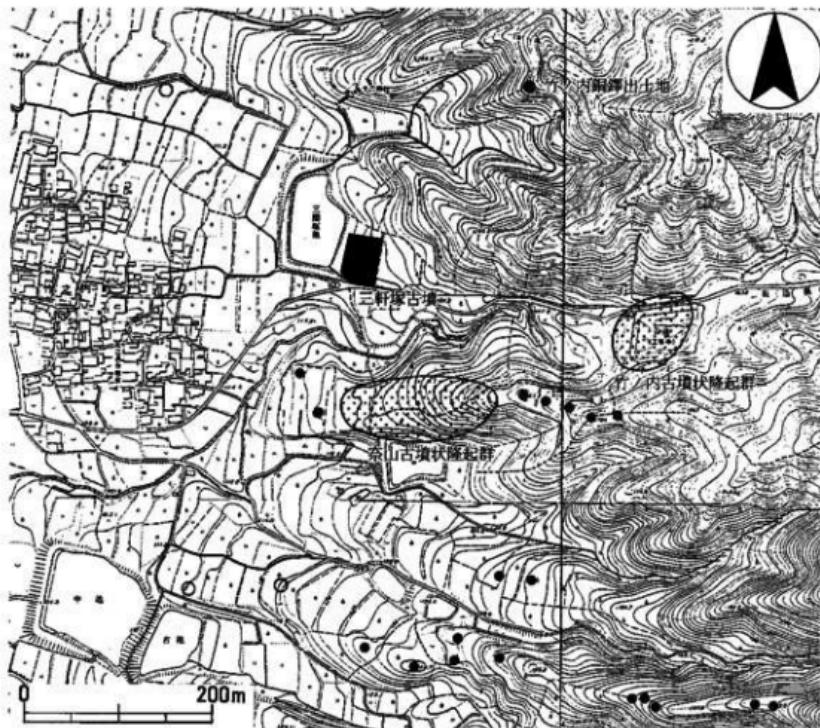
第1図 平成2年度調査地点

I 三軒塚古墳の調査

1 はじめに

三軒塚古墳は、天理市乙木町郷山に所在する直径約20mの古墳状隆起であり、奈良県遺跡地図第2分冊に11-B-304円墳?と記載されている。今回、当該地において個人住宅建築に伴う造成工事が計画され、古墳状隆起の大半を削平するかたちで施工されることから、事前に埋葬施設の位置および古墳の範囲確認を目的として発掘調査を実施した。

当古墳の周辺では、東方および南方に直径10~15m程度の墳丘規模をもつ小円墳が数多く所在するが、そのほとんどが未調査のため実態は不明である。また、時期的には遅るが、北東方約300mの丘陵斜面では昭和14年(1934年)に袈裟模文銅鏡が発見されている。



第2図 調査地点および周辺の遺跡分布図

2 調査の概要

(1)調査の方法と経過

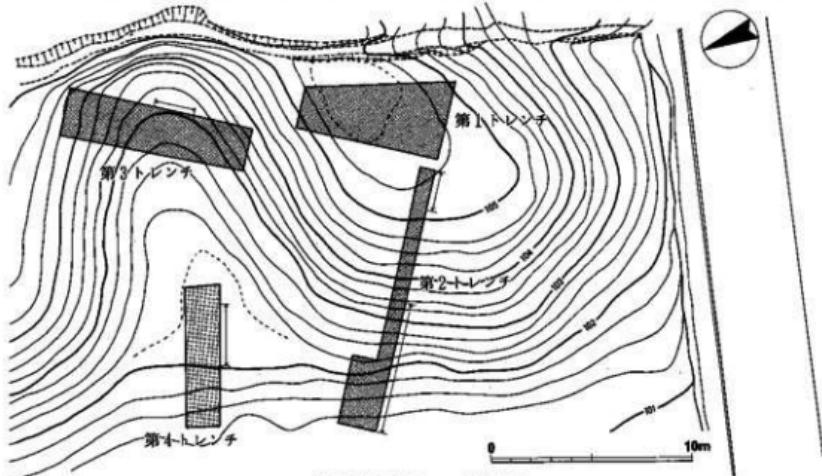
調査に先立ち調査対象地全域の地形測量を実施した結果、丘陵尾根筋の末端部に築造された円墳である可能性が見込まれたため、調査地内の地形を考慮して墳頂部（第1トレンチ）、墳丘斜面（第2トレンチ）、墳丘裾の鞍部（第3トレンチ）および墳丘裾平坦部（第4トレンチ）に調査区を設定し、すべて人力掘削により調査を開始した。

その結果、当初の調査目的に反して墳頂部より墳丘裾にかけて墳丘盛土、埋葬施設等の古墳に関連する土層、遺物は認められず表土直下で破碎された礫と砂の堆積が認められたため当該地が古墳ではなく後世の盛土によって形成された円墳状の地形を示しているために古墳と誤認されていたことが判明した。そのため、当初の目的を変更し、当該地における遺物包含層、構構等の有無確認に努めて調査を進行した。

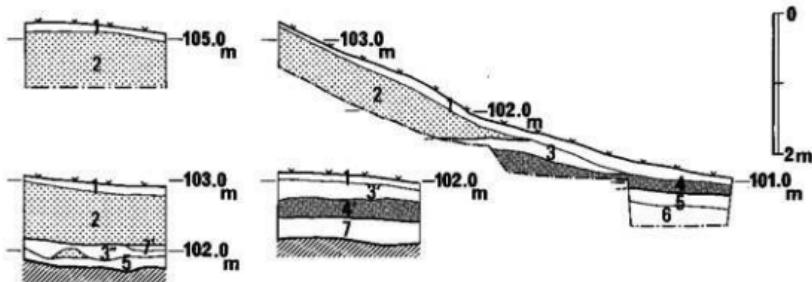
調査は、平成2年7月30・31日に事前の地形測量を実施し、引き続き8月2日より発掘調査を開始して同日20日に終了した。各トレンチの総調査面積は約70坪であった。

(2)層序

第1トレンチおよび第2トレンチ：墳頂部では、層厚15～20cmの表土層（1）の直下に拳大の角礫を極めて多く含む黄灰～黄褐色の砂礫土（2）の堆積が60cm以上認められ、墳丘西斜面においても同様の堆積がみられた。墳丘西裾部では、この砂礫土の堆積は標高101.7m付近ではほぼ水平に近い状態で途切れ、この直下に褐～暗褐色の礫を含む砂質土（3・4）が層厚約



第3図 調査トレンチ位置図



第4図 各調査トレンチ柱状土層図

60 cmで緩やかに傾斜をもって堆積しており、下半には多量の疊と弥生後期～中世の土器片が含まれる。この層より下位では約 50 cm の深掘りをおこなったが褐色～暗褐色の砂質土（5・6）が交互に堆積し、遺物はほとんど含まれていなかった。

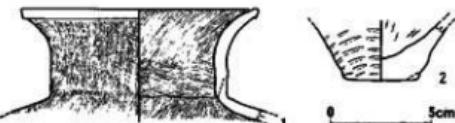
第3トレンチ：墳頂部と同様に表土直下で黄褐色の砂礫土（2）が層厚約 80 cm、標高 102 m 付近より上位に堆積し、下位は 2 と同色の黄褐色砂質土のブロックを含むにぶい黄褐～褐色の軟質の砂質土が層厚約 40 cm で介在し、以下は堅く締まった褐色砂礫土の基盤層となっている。

第4トレンチ：谷部の平坦面では第1～3トレンチで存在した砂礫土（2）は認められず表土層直下で流入土とおもわれる褐色の小礫混じり砂質土（3'）を介在して、下位に若干の土器片を含む褐色砂質土（4'）が層厚約 30 cm で堆積しており、以下は砂礫を多く含むにぶい黄褐色（7）を挟み標高 101.2 m 付近より西方へ緩やかに傾斜して基盤層が続いている。

(3)出土遺物

今回調査では、第2トレンチ西端および第4トレンチのみに遺物包含層（4および4'）が確認されコンテナ1箱程度の土器片が出土しているが、そのほとんどが小片である。時期的には、弥生後期のものと黒色土器、瓦器などの平安・鎌倉時代の土器類に限られる。

1 は壺型土器の口縁部片である。短く立ち上がり外上方に外反する口縁形



第5図 出土土器実測図

態であり、端部は外側に面をもつ。外面ともに細かいヘラミガキ調整が施され、にぶい橙色の精良な胎土を用い全体的に丁寧なつくりである。復元径 11.6 cm、現在高 5.1 cm を測る。

壺型土器の底部片である。逆台形の底部の外面に粗い叩き目を残し、内面は右回りの板ナデ調整が施されている。にぶい黄褐色の色調を呈し、胎土には粗い砂粒を多く含む。焼成はやや

良好である。底径 3.6 cm、現存高 3.0 cm を測る。

1・2 とも第 2 レンチ西端 4 層よりの出土である。両者はいずれも弥生後期後半に帰属するものである。

3 まとめ

今回の調査の結果、当古墳は後世の盛土により形成された円墳状の古墳状隆起であることが判明した。しかし、岩盤層を破碎した礫を旧地形上に高さ 3 m 程度にわたり被覆するほどの土木工事が人為的におこなわれている背景には重要な歴史的事実が考えられる。

調査中に付近の古老から太平洋戦争末期の昭和 19 年頃に旧帝国海軍の兵隊が当該地において土木作業をおこなったとの逸話を教えられ、実際に、今も調査地の東方山中に当時掘削されたトンネル状の塹壕が残るという。それらは調査地の西南方 2 km のところにあった柳本飛行場（俗称）に所属する戦闘機を秘密裡に格納、避難する為のものであった。このことから当時より小古墳の分布が知られていた当該地域に敵の攻撃を逃れるためにカムフラージュする意味で古墳状に廃土処理したものが三軒塚古墳であったと考えられよう。また、同様に後世の盛土による古墳状隆起が存在する可能性もあるため、今後においても留意する必要がある。

ほかに、盛土下層の遺物包含層については、弥生後期の土器が主体を占めることから、付近に集落城の存在が考えられ、近接して出土した竹ノ内銅鐸との有機的な関連が想起される。

II 西ノ山古墳・成願寺遺跡の調査

1 はじめに

西ノ山古墳は、天理市豊生町に所在する径約35mの円墳である。奈良県遺跡地図第2分冊では11-B-150西ノ塚古墳とされている。現状では周囲に石垣が巡り、墳丘上および周辺は果



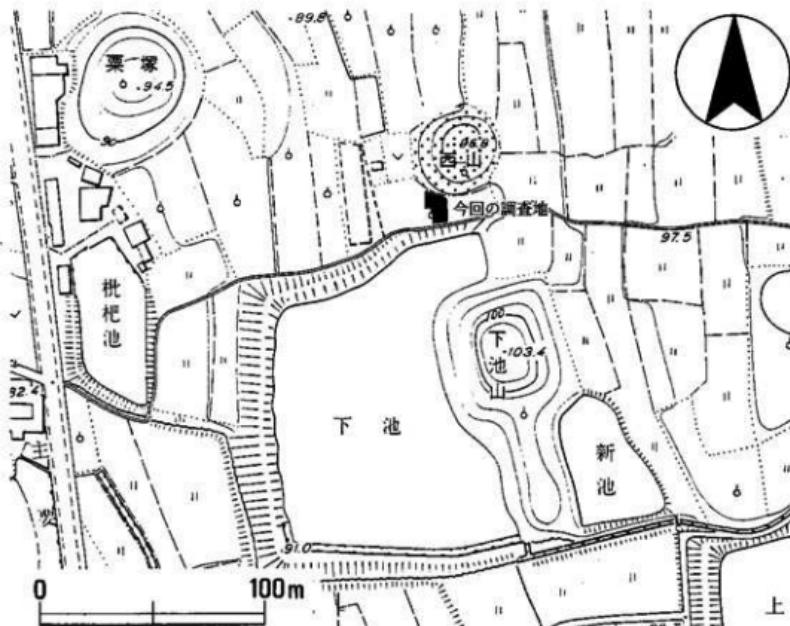
第6図 調査地点および周辺の古墳分布図

樹園もしくは畠地となっている。

これまでに当古墳において発掘調査は実施されたことが無く、埴輪、土器片等の遺物が採集されたという記録も一切無いため、築造時期など全く不明な点が多い。また、墳丘の測量図も作成されていないうえ、古くから農地化がすすみ墳丘および周辺が著しく改変されているために現状からは墳形が円墳であるといえる確証はない。

当古墳は、前期古墳を主体として形成される大和古墳群に属し、南には下池をはさんで全長約115mの前方後方墳である下池山古墳が隣接する。また、東方の萱生の集落の中には墓石と埴輪を持つ西山塚古墳が位置し、西方に栗塚古墳、北西方にマバカ古墳などの前方後円墳が、北方には低く長い前方部をもつ前方後方墳の波多子塚古墳が所在している。

なお、大和古墳群を包括するように成願寺遺跡が広範囲に広がっており、弥生～古墳時代の遺物の散布が認められている。そのため、今回の調査地においても西ノ山古墳築造以前あるいは以後の遺構・遺物包含層が確認されることも予想され、当古墳と同様に成願寺遺跡に関しても新知見が得られることも念頭におきながら慎重に調査を進行した。



第7図 調査区位置図

2 調査の概要

(1)調査の方法と経過

今回、西ノ山古墳南側の周濠相当部分において専用住宅の建築が計画され、これを契機として発掘調査を実施した。当該地では前述のように西ノ山古墳周濠部のみならず、成願寺遺跡の範囲内にも該当するため、結果として上層造構面と周濠部分の2面にわたる調査をおこなった。

当初は周濠相当部分に東西約8.6m、南北長辺約14.5m、同短辺約9.5mの台形状の調査区を現状の埴丘裾石垣に取り付くように設定し、調査を進行した。そして、本調査区において検出の周濠埋土を完掘した後、埴丘裾部から周濠部の傾斜面に貼石状の葺石を確認したため、調査区の西側に幅約3m、長辺約10mの拡張区を設定し、順次上層造構から検出して、周濠埋土の掘削をおこない埴丘裾部の確認に努めた。

調査は現地表下約0.5mまで重機により掘削をおこない、以下はすべて人力により進行した。

平成2年11月19日より調査を開始し、同3年1月31日にすべての作業を終了した。総調査面積は約130m²であった。

(2)層序

当調査地における堆積層序は、緩斜面上の立地から調査区の東西で微妙な差異が認められるが基本的には以下のようない状況となっている。

第I層：淡黒色砂混じり土 層厚20cm前後。表土層および旧耕作土である。

第II層：灰黄褐色砂質土 層厚10～20cm。近代の果樹園造成にともなう堆積土層である。

第III層：にぶい黄褐色砂質土 層厚15～30cm。中世後期～近世の遺物包含層である。

第IV層：にぶい褐色～暗灰黄色砂質土 層厚20～30cm。瓦器・土師器の小片を含む中世前期の遺物包含層であるとともに周濠埋土最上層の堆積土となっている。

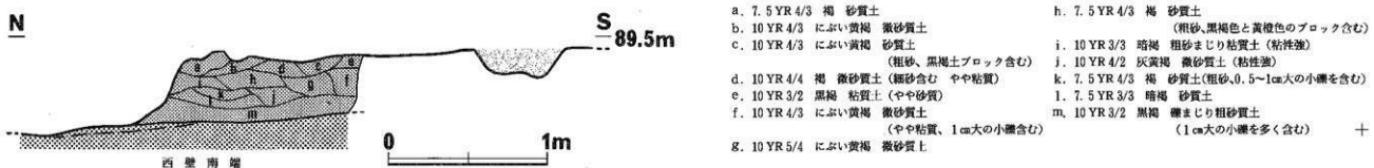
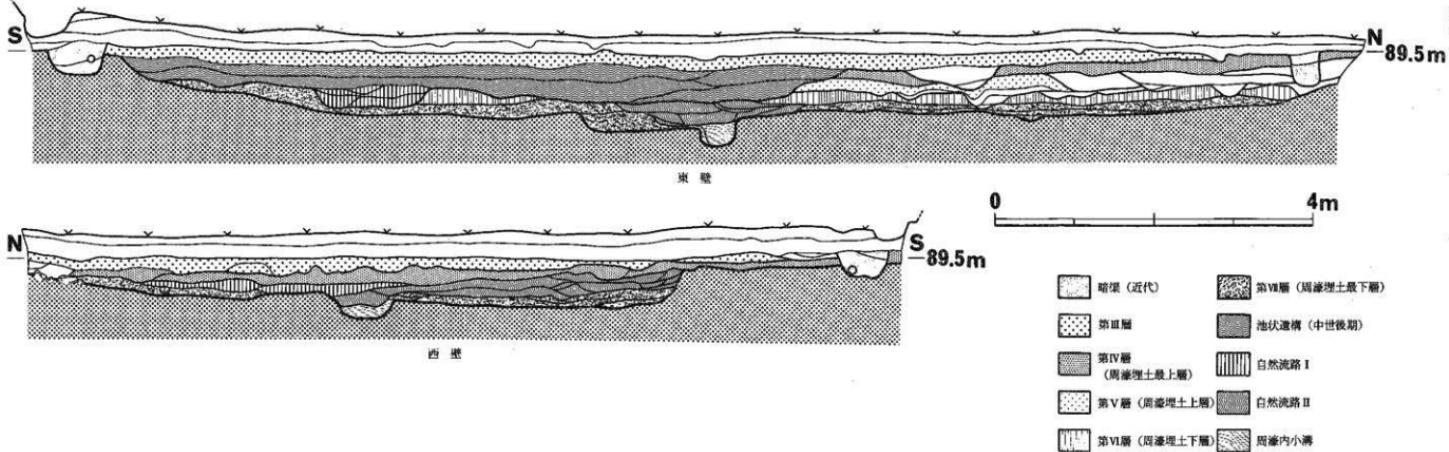
第V層：暗灰黄色砂質土 層厚15cm前後。調査区の西半に遺存し周濠埋土上層となる。

第VI層：黒褐～黒色砂礫混じり粘質土 層厚15cm前後。第V層と同様に西半のみに遺存。

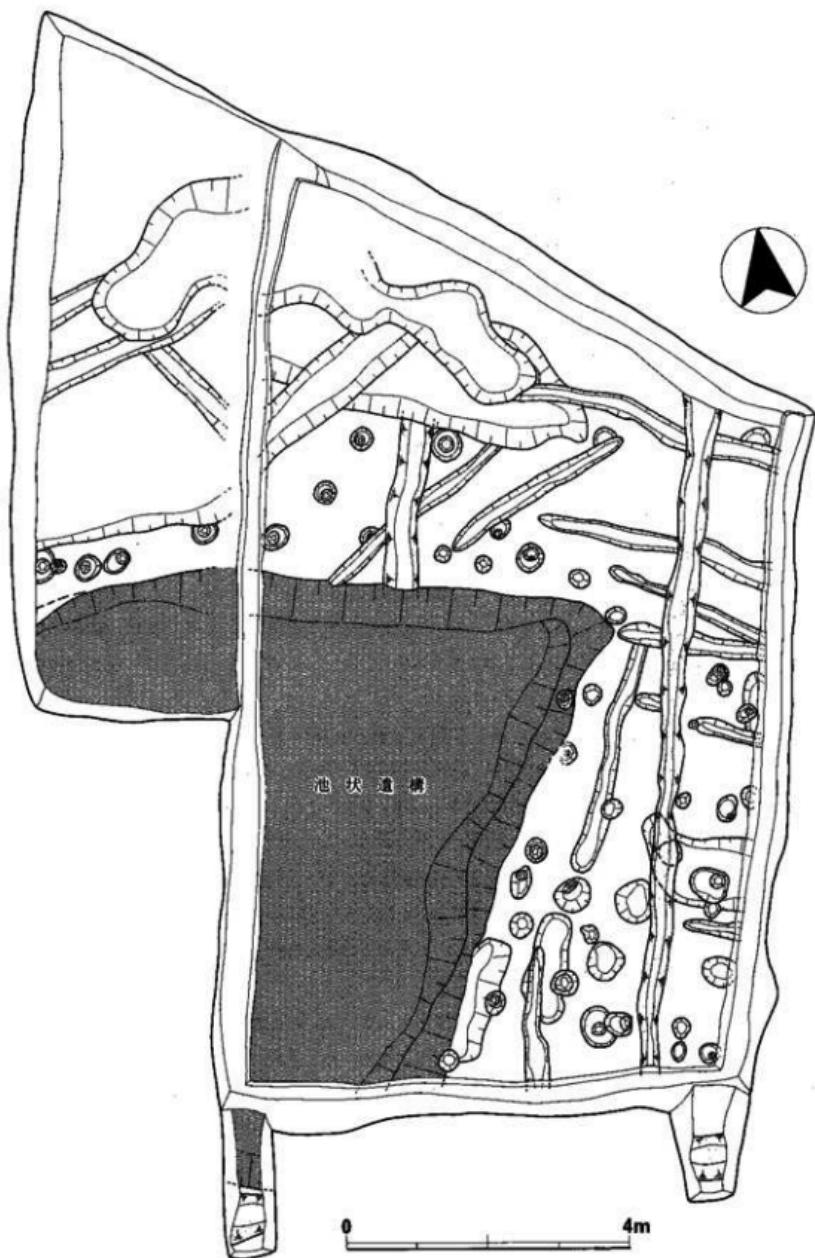
上面より褐灰色～灰黄褐色の砂礫土を基調とし、須恵器・土師器・黒色土器等の奈良後期～平安前期の土器片を含む自然流路Ⅰを検出している。周濠埋土下層となる。

第VII層：暗灰～黒褐微砂質土（粘質） 層厚10～25cm。周濠底面直上に堆積し、調査区の北端では粘性の強いシルト質土となり、若干量の須恵器・土師器の土器片を含むする周濠埋土最下層（葺石の覆土）となっている。

また、調査区中央を南東～北西に流れる自然流路Ⅱを上面で検出しており、にぶい黄褐色～黒褐色のシルト・粗砂を基調とする埋土から弥生土器片、サヌカイト製石器や古墳時代中期～後期の須恵器・土師器片が若干量出土している。



第8図 調査区西壁・東壁土層図および外提盛土(東壁)土層図



第9図 上層遺構平面図

第VII層：灰黄褐色～黒褐色細砂混じり粘質土 周濠の底面となり、若干の土器細片を含む墳丘
裾部分の黒褐色粘質土を除きそのほとんどが無遺物層となっている。外堤部盛土の下
位では黄褐色微砂が地山となる。

(3)上層遺構面（成願寺遺跡）

第IV層の中世前期の遺物包含層をベースとして中世後期～近世の遺構を検出した。これらの
遺構群は後述する西ノ山古墳外堤部盛土中に包含される弥生中・後期の遺物、周濠埋土中にみ
られる自然流路等の遺構・遺物などとともに古墳と重複して存在する成願寺遺跡の一様相を示
すものである。しかしながら、現状では広範囲におよぶ遺跡の一角でのみ確認されたものであ
るため、地点名を付して『成願寺遺跡西ノ山地点』として呼称しておく。

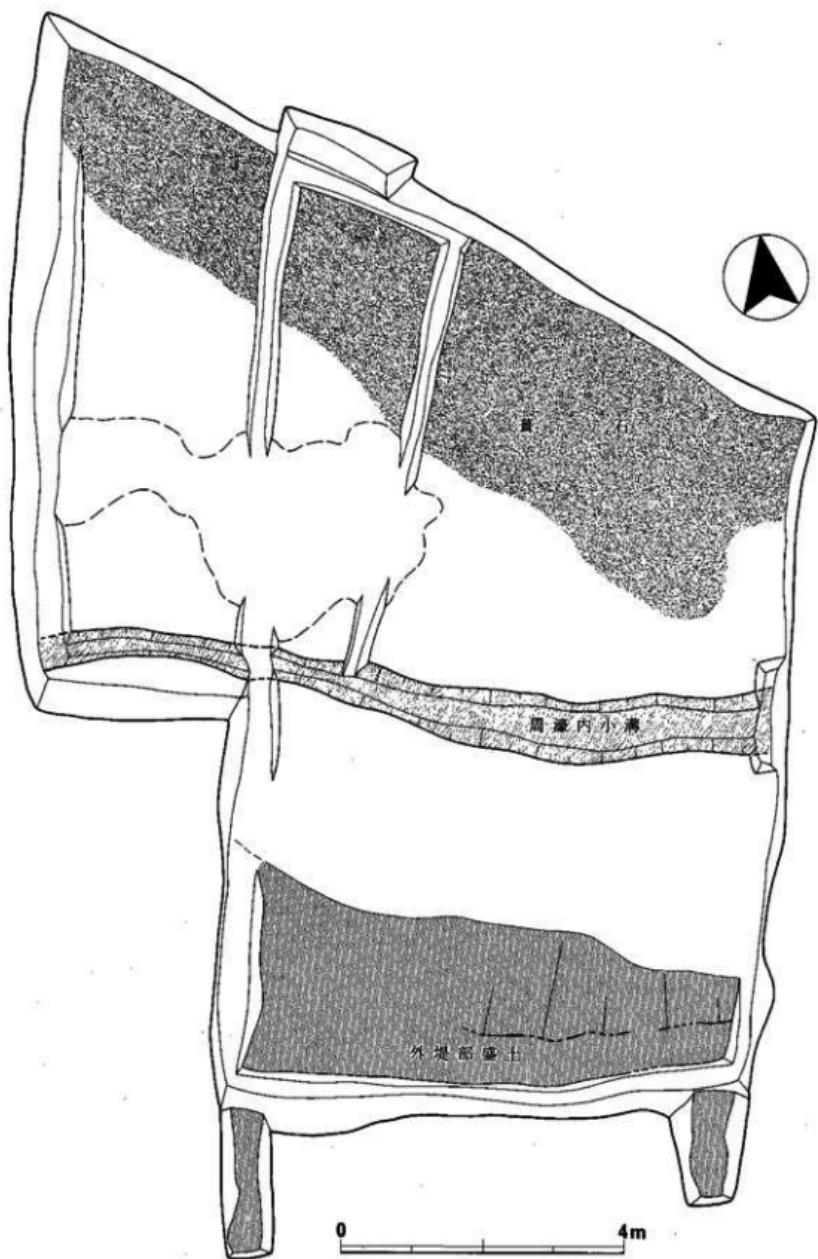
以下、明確な遺構面を成す第IV層上面の主要な検出遺構について概略を記す。

柱穴群：総数47基の柱穴を検出している。いずれも円形のプランを呈し規模も大小2種が
あり、大きいもので径約40cm前後、小さいもので径約20cm前後である。深さも大半
が25cm程度の残存状況を呈し、大きい柱穴には一部に根石とみられる自然礫を掘方
底面直上に置くものもある。各柱穴ともに土師器の細片が出土しているが、確実に時
期、建物のプランを決定することは容易ではない。時期的には2時期ないしは3時期
の建物跡を構成するとおもわれる。

池状遺構：調査区の南西部分を占め、不整形な平行四辺形のプランを呈すると考えられる。
東西幅は検出部分で約8m、南北長は約9mを測り、深さは最深部で約0.5mであ
る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は上下2層に大別でき、上層が灰黄褐色～
黒褐色の粘性を帯びた砂質土、下層がにぶい褐色砂質土となっている。遺物は主に
上層から出土しており、龍泉窯系の清磁碗の破片（第13図-1・2）を含む中世後
期の土器片が主体を成す。下層からも同時期の土師器片（第13図-3）が出土して
いるが、自然流路1の上部を切り込むように池状遺構が掘り込まれているため、平
安前期の須恵器片を混在する。

遺構の性格については、東辺部分のみが二段に掘り込まれており、調査区東半の
柱穴群が構成する建物に隣接して位置するため、建物に付随する施設としても考
えられる。素堀りの土坑であり、おそらく庭園の池のようなものとは考え難く生活用
水の貯水池もしくは洗い場のような性格付けができるのであろう。

上記の遺構の他にも土坑、素堀り小溝等を検出している。また、調査区を南北に走る2条の
溝と南端拡張トレンチにみられる東西溝は暗渠であり、伊万里焼の染付片の出土から幕末期の
掘削に掘ることがわかる。なお、第IV層上面の遺構面で後述の外堤部の輪郭を検出している。



第10図 下層造構(周濠)平面図

(4) 西ノ山古墳周濠

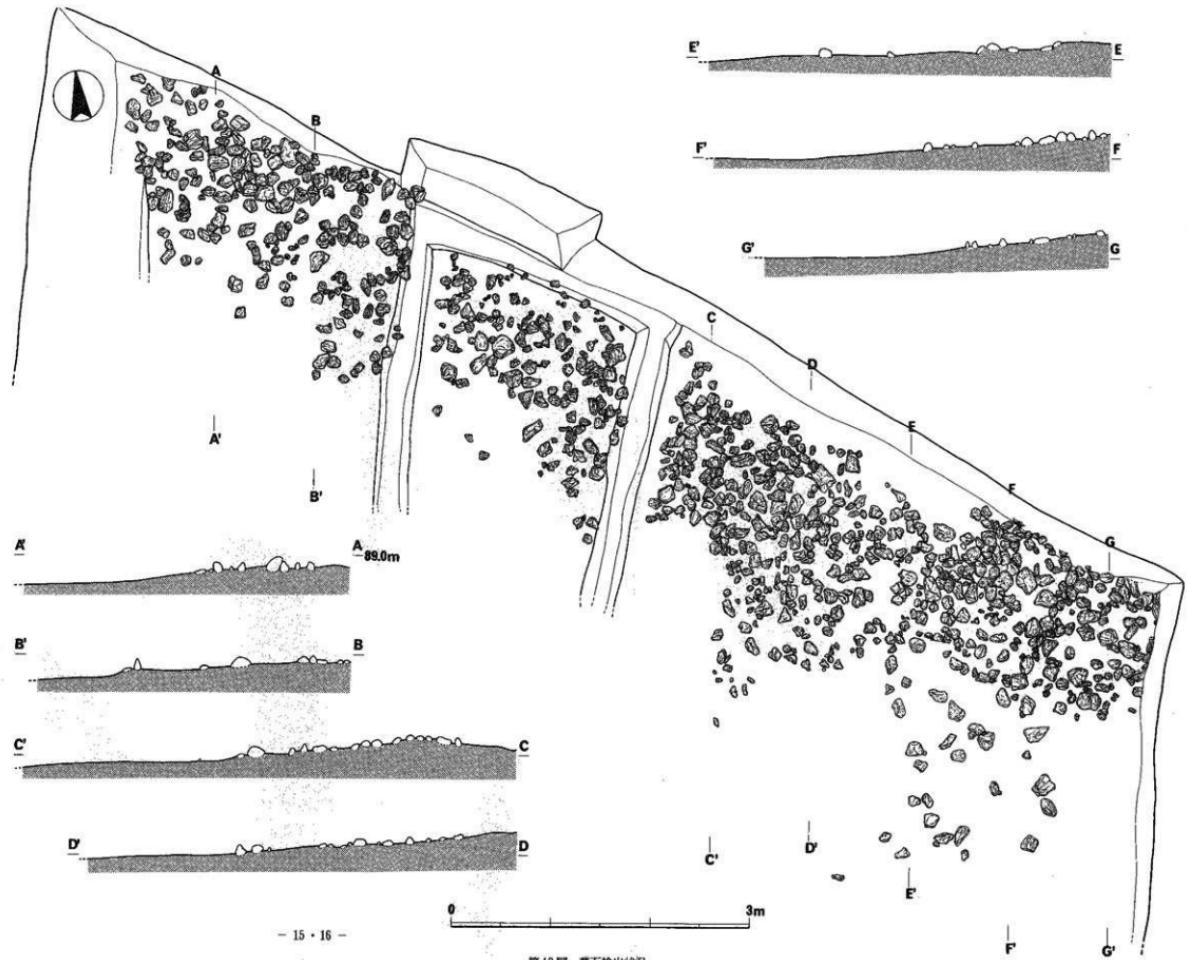
今回の調査では、墳丘南側の一部で周濠および外堤相当の盛土を確認している。また、墳丘裾部分から周濠部中央部分にかけての緩やかな斜面上に貼石状の葺石が敷き詰められていたことが判った。周濠部中央の最深部では、築造時の掘削と考えられる小溝が掘り込まれており、古墳の立地する尾根の南側に西に向かって下降する谷筋沿いに延びるものと予想できることから周濠内の湧水や谷川の水流を常に排出して空堀の状態にするための排水溝として考えられよう。しかしながら、当古墳の築造時期を示す土器、埴輪等の遺物は全く出土していない。

新知見として得られたのは上述したような内容の調査結果であったが、以下で周濠部の調査結果について詳述しておく。

周濠埋土の層序：第IV層が周濠埋土の最上層に相当し、上面には中世後期～近世の遺構が掘り込まれている。調査区の西半にのみ周濠埋土上層に相当の第V層の堆積があり、瓦器、土師器等の出土から中世前期の階段の周濠内への流入土であることが判る。周濠埋土下層相当の第VI層も同様に西半のみに存在し奈良後期～平安前期の遺物を包含する流入土である。また、上面検出の自然流路Ⅰからも同時期の遺物が出土している。周濠埋土最下層相当の第VII層は、周濠底面直上に薄く堆積する粘質土であり、周濠内が湿地状態であったことを示している。若干の遺物を含み、上面から自然流路Ⅱを確認している。これらの流路は、いずれも南東～北西に傾斜して流れしており、周濠内の堆積状態から東方の丘陵上から谷筋沿いに流入した土砂や水流により形成されたものと考えられる。周濠埋没の過程についても同様の自然条件によるものと理解できよう。



第11図 蔷石上面遺物出土状況



葺石検出状況と遺物出土状況：検出された葺石は、調査地区の北端から幅2～2.5mの緩やかな斜面上に遺存し、人頭大から拳大の大小の亜円礫、亜角礫を用いて敷設されていた。石材は主として当地域の谷間に散在する花崗岩を主体とする河原石が用いられていた。周濠の中央最深部までの間にこれらの葺石が敷設されていたことが予想され、部分的に原位置を保つ葺石も幾つか残っていたが、後世の自然流路や水流による擾乱により周濠底面が凸凹を呈する状況であった。

遺物は須恵器、土師器の小片が葺石の隙間や覆土中から出土している。葺石検出部分の中央部に集中して出土しており、若干の混入遺物も含まれるが時期的には古墳時代中期頃を主体としている。おそらくこの時期には墳丘の崩壊が始まっていると考えられる。

外堤部相当盛土：調査区の南端で検出した。第IV層上面検出の中世後期～近世の遺構群により上部を削平された状態で検出されており、上端は上層検出の池状遺構や柱穴等により部分的に擾乱されているが、積み上げ土の基底となる部分は良好な状態で遺存していた。

盛土層の堆積状況は、墳丘裾の葺石直下に見られた弥生中・後期の土器片や石器類を含む第V層の黒褐色粘質土を基底として、上部に高さ約0.3mで黄褐色の砂質土を基調とする積み上げをおこない、その中に暗褐色の粘質土のブロックが含まれる状況を呈していた。これらの盛土中にも第V層と同様に弥生中・後期の遺物が含まれることから、外堤部構築の際に周濠掘削時の堆土を積み上げていたことが考えられる。検出面で南北の幅が約2.5m以上、基底部が幅約5～6m以上と思われ、周濠測では基底部が弧状の形態を示している。

周濠内小溝：調査区のはば中央を東西に横断する溝である。周濠内の最深部を東から西に地形にそった形で高低差をもって掘削されている。上部に重複して自然流路1および自然流路2が流れていたために中央部分では浅く遺存していた。上幅が約0.3～0.9mを測り、断面形状は浅いU字状を呈する。埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐色の細砂および小礫混じり粗砂であり、無遺物である。

層位的に見ても周濠底面の第V層の黒褐色粘質土および黑色砂混じり粘質土の上面から掘り込まれていることが判り、築造当初の掘削であることに間違いはない。おそらく周濠内の排水を目的として掘削された溝であると思われる。

(5)出土遺物

土器類：1・2は龍泉窯系の青磁碗である。1は、外面口縁部付近に雷文帯文様をもち、上田秀夫氏の分類のC-II類（上田 1982）に属する。2は口縁部が外反し、端部を丸くおさめるもので、全面に施釉後外底の釉を削り取り、内面見込み部は釉剥ぎをおこなっている。上田氏分類のD-II-b類に属す。

3は土師質羽釜である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は内側に折り返す。

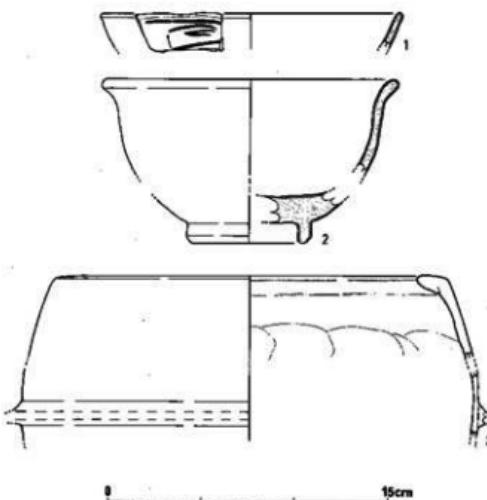
口縁端部は強いヨコナデ仕上げであり、やや尖り気味である。鋤の位置は口縁部よりもかなり低く、破損のため形態は不明である。布留遺跡の分類（毛利光 1985）では羽釜 d 1類に該当する。これらの土器はいずれも概ね中世後期（15世紀代）の帰属時期が考えられる。

4～6は、弥生土器である。4の壺は底部に木葉文が線刻される。弥生中期初頭（畿内第II様式）に属するものであろう。5は外面に叩き目をもつ壺で、6の壺とともに概ね弥生後期半頃に帰属すると考えられる。4は第VI層、5・6は第IV層の出土である。

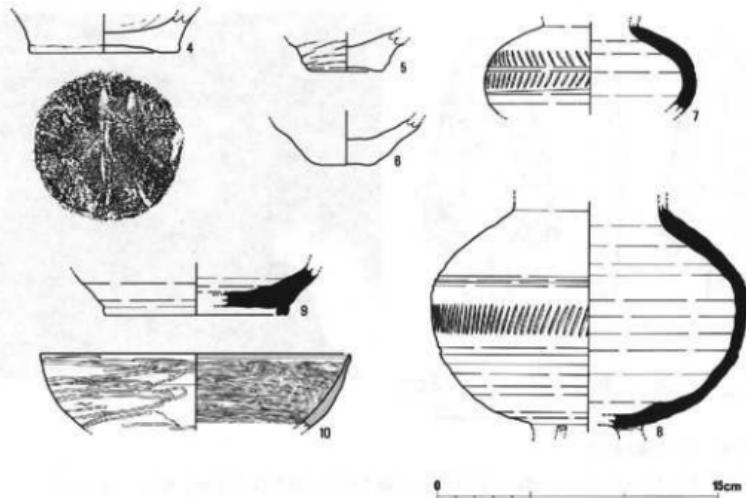
7・8は葦石上面覆土中より出土した須恵器である。墳丘上から転落したものとおもわれる。7は甕であるが、円孔部分を欠く破片である。偏平な球体の体部をもち、外面には羽状の櫛描列点文を施す。体部下には回転ヘラ削りがみられる。8は台付長頸壺である。体部中央に沈線を3条めぐらし、櫛描列点文を施す。台部には3方に方形透かしを穿つ。体部下半に回転ヘラ削りをおこなった後ロクロナデで仕上げる。

9は高台をもつ須恵器壺の破片である。高台はほぼ垂直に取りつく。内外面ともロクロナデで仕上げている。墳丘裾部の第VI層よりの出土である。

10は瓦器碗である。外面に粗い、内面に密なヘラミガキを施す。口縁端部の内側に沈線をもつ。白石編年（白石 1969）のII-4～5、川越編年（川越 1983）のII-A～Bに相当し、12世紀前半の時期が考えられる。第IV層より出土している。



第13図 出出土器実測図1



第14図 出土土器実測 図2

No	器種	調整手法	色調	胎土	焼成	法量(cm)	備考
1.	青磁・碗	外、ナデ	暗緑灰色	密・精良	良好・堅致	復元口径 現存高 15.8 1.9	雷文帯、約1/4残存
2.	青磁・碗	外、面台ロクロケズリ 内、見込み部軸ハギ	透明白色 透明白色 透明白色	密	良好・堅致	復元口径 復元底径 15.4 6.2	上半約1/5、下半約 4/5残存、頂上復元 ロクロ右まわり
3.	土師器・ 羽釜	外、ナデ 内、ナデ、板ナデ	10YR8/3 浅黄	密・精良	良好	復元口径 18.4	約1/4残存、頂上復元
4.	弥生・壺	外、ヨコナデ、チチヘラミガキ 内、板ナデ	10YR7/4 にぶい黄 橙	密、小石 細砂多く含む	やや良好	底径 現存高 7.9 2.1	底部に木蘿文
5.	弥生・壺	外、タタキ	10YR8/1 灰白	密、細砂 含む	良好	底径 現存高 4.2 2.1	磨滅が激しい
6.	弥生・壺	内、外面とも調整不明	5Y5/1 灰	密、細砂 多く含む	やや軟	底径 現存高 2.4 2.4	
7.	須恵器・ 甌	外、ロクロナデ、回転ヘラケズリ 内、ロクロナデ	N7/ 灰白	密	良好・ 堅致	現存高 5.2	羽状に横排列点文、約1/4残存
8.	須恵器・ 台付・長 甌	外、ロクロナデ、回転ヘラケズリ 内、ロクロナデ	N6/ 灰	密、細砂 多く含む	やや良好	現存高 12.3	横排列点文、三方 に透し、擦きひずみあり
9.	須恵器・ 甌	外、ロクロナデ 内、ロクロナデ	N6/ 灰	密、細砂 多く含む	良好	復元底径 現存高 9.8 2.8	約1/4残存
10.	瓦器・甌	外、粗いヘラミガキ 内、密のヘラミガキ	N4/ 灰	密、小石 含む	良好	復元口径 現存高 16.6 4.1	口縁部に沈線1本、 約1/4残存

表1 出土土器 観察表

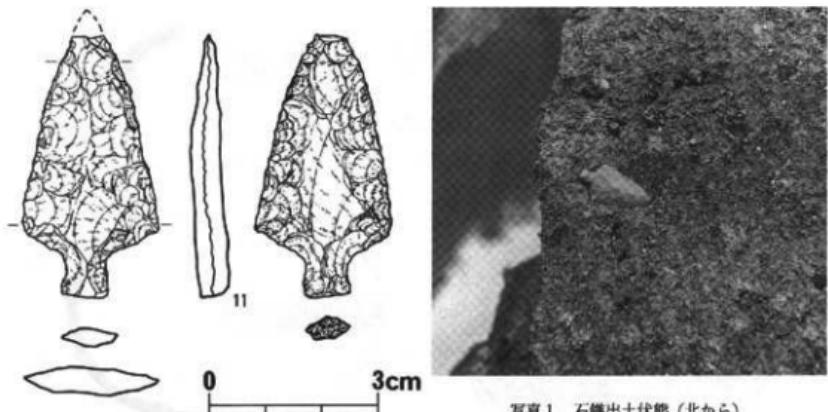


写真1 石鏃出土状態（北から）

第15図 出土石鏃実測図

石器類：11はサヌカイト製の凸基有茎式石鏃である。現存長4.6cm、幅2.4cm、厚さ0.5cmを測る。基部の先端には素材の縛面が残る。基部付近の抉り部分は広角に仕上げられており、やや幅広な形態となっており、先端を古く折損するものの均整のとれた形態を呈する。原縛より薄く剥離された素材剝片を押圧剥離により整形し、縁辺を細かい調整打で側縁、刃部の加工をおこなっている。色調は淡灰黒色を呈する。調査区南東隅の第VI層より出土している。

3 まとめ

今回の調査の結果、西ノ山古墳が外周に周濠を巡らし、墳丘裾から周濠底面付近にまで貼り石状に敷き詰められた葺石をもつことが明らかになった。このように周濠底面にまで葺石を敷設する古墳としては、古墳時代中期初頭に位置付けられる奈良市瓢箪山古墳（河上1978）に墳丘裾と外堤内斜面に一定幅で敷設された状態での検出例がある。また、周濠内小溝については、築造時により付随した遺構であることが層位的に確認できた。機能的には、周濠内を常に空堀状態にしておくための排水溝となり得るもので、周濠底面直上の堆積土層（第VII層）の状況から、周濠内がわずかに湿润状態を保つようになっていたと考えられる。同様の溝は、古墳時代中期後葉の奈良市杉山古墳周濠内（奈良市教委1991）においても検出されている。

外堤部の盛土層を確認したことから、周濠の幅は今回の調査地点では現状の墳丘裾部分から計測して約11～12m程度であるのが判り、それに加えて外堤部分が南側に近接する下池山古墳と位置的に共有している可能性を示している。

当古墳の築造時期については、当初予想していた古墳時代前期にまで遡る土器類や埴輪片等が全く出土していないために時期を特定することはできない。しかしながら、最近の調査例か

ら、大和古墳群には中山大塚古墳のように埴輪をもたない古墳も幾つか存在することが確認されており（今尾・青木1991）、当古墳においても築造当初より埴輪をもたない古墳であったと考えられる。なお、葺石上面あるいは埴丘裾葺石覆土中出土の土器類は、古墳築造後の埴丘上でおこなわれた祭祀行為に関わる遺物の流入であると理解でき、5世紀後葉頃の帰属時期が考えられる。周濠内の施設、葺石の状況等からは、古墳の外部施設に関する調査例の寡少な現状では類例に乏しく検討し難いが、築造時期は古く遡っても前期末～中期初頭の範疇でおさまるものと考えておきたい。いずれにせよ、発掘調査例が少ない大和古墳群にあって、今回の調査により少なからず知り得た情報の意義は大きい。古墳群中における当古墳の位置付けに関しては、今後さらに周辺部の調査の機会を待たねばならない。

上層遺構である成願寺遺跡西ノ山地点の調査では、池状遺構、柱穴群などの中世後期の遺構面を検出しておらず、輸入陶磁器の出土から名主クラスの階層の屋敷地の一角であったと考えられる。また、併せて当該地においての奈良時代～中世後期にかけての古墳周濠埋没過程での自然環境および土地利用の変遷を窺い知ることができた。広範囲に広がりをもつものの、実態が不明な成願寺遺跡の一様相を垣間見ることができたことが大きな成果と言えよう。

付記

今回の調査の際、西ノ山古墳を含む大和古墳群の航空写真を撮影した際、新たに知り得た知見について記しておく。図版四の中央の下池山古墳の南側に西に大きく開く前方部をもつ後期古墳様の高まりが見える。航空写真撮影後これに気付いたため現地を踏査した結果、周囲を石垣で囲まれた果樹園となっており、遺物の散布も認められなかった。全体に底平な地形を呈していたが後円部は前方部に比して少し高く古墳である可能性も否定できない。石垣には葺石に用いられる河原石が積まれており、後世に改変されたものとも取れよう。ここでは一応後期の前方後円墳状の隆起として仮に「下池南古墳」とでも命名しておく。

引用文献

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究会』No.2 日本貿易陶磁研究会
毛利光用子 1985 「布留遺跡 布留（西小路）地区出土の中世土器」考古学調査研究中間報告11 埋蔵文化財天理教調査団
白石太一郎 1969 「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」『古代学研究』54 古代学研究会
川越俊一 1983 「大和地方の出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所
河上邦彦 1978 「1 奈良市葛原山古墳の調査」『奈良県古墳発掘調査集報II』 奈良県文化財調査報告書第30集 奈良県立橿原考古学研究所編
奈良市教育委員会 1991 「史跡大安寺旧境内 杉山古墳発掘調査の概要」『平成2年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会』 奈良県市町村埋蔵文化財担当者連絡協議会
今尾文昭・青木勘時 1991 「中山大塚古墳第2次発掘調査報告書」 橿原考古学研究所

III 長寺遺跡（第4次）の調査

1 はじめに

天理市櫟本町から幡町にかけて、創建が奈良時代に推測されている長寺（おさでら）廃寺がある。これまで高良（こうら）神社での調査（第2次調査）^{出典}で多量の瓦類が出土する包含層が確認され、同神社の北側にある天理市立櫟本公民館の建設に伴う事前調査（第1次調査）^{出典}では、瓦類と共に規模の大きい奈良時代の掘立柱跡が検出され、長寺に伴う建物跡と推定されている。そうした状況から寺域の中心は高良神社のあたりと考えられている。しかし、伽藍配置の様子や寺域を示す造構は、不明な点が多い。また、第3次調査地点では長寺に関する遺構は



第16図 調査地点位置図
1. 第1次調査地点（昭和55年度）
2. 第2次調査地点（昭和60年度）
3. 第3次調査地点（昭和63年度）
4. 第4次調査地点（平成2年度）

見つからなかったが、瓦類が比較的多く出土しており、長寺に関する遺構はさらに広がる可能性が考えられる。他に長寺遺跡に伴う調査で弥生時代の遺構が検出されており、第1次調査や第3次調査では、弥生時代中期の土器が数多く出土している。

2 調査の概要

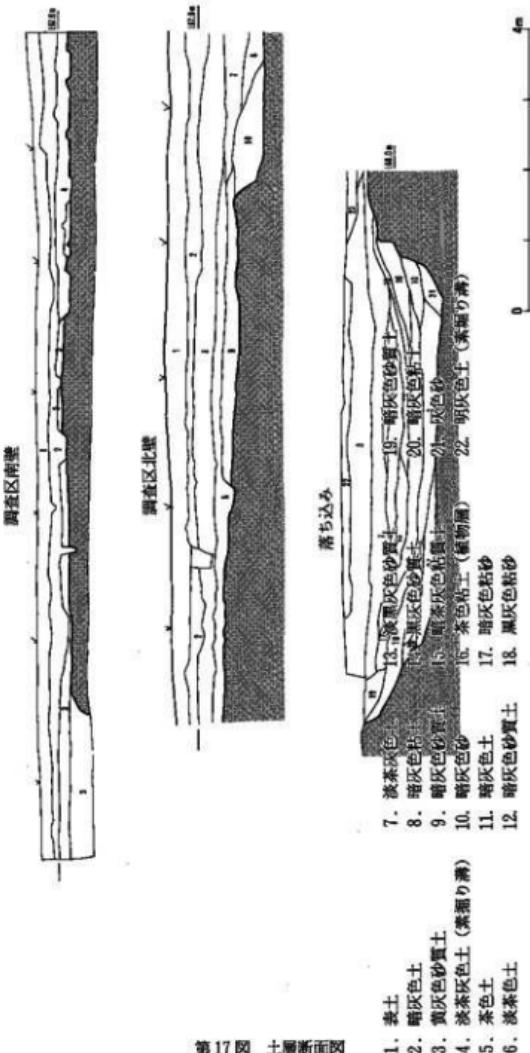
(1) 調査の契機

第1次調査を実施した天理市櫻本公民館の西側に隣接する水田地で宅地造成（個人住宅）が起こり、事前の調査を実施することになった。同地点は高良神社の北側30m程の所で、長寺遺跡に伴う遺構や瓦類が多量に出土する可能性が予測された。

調査区は家屋が築かれる敷地内で、南北20m、東西12mで設定し、基盤層まで重機を利用して掘り下げをおこなった。

(2) 基本土層

調査区の南半部と北半部とで土層堆積の様子が異なっていた。南半部では耕土上面から約0.6m下位で黄褐色土の基盤層が検出される。北半部では耕土より1.4～1.6m程下位で基盤層があり、地形が南北に向かって傾斜している様子であった。特に北半部では土器類を包含した茶

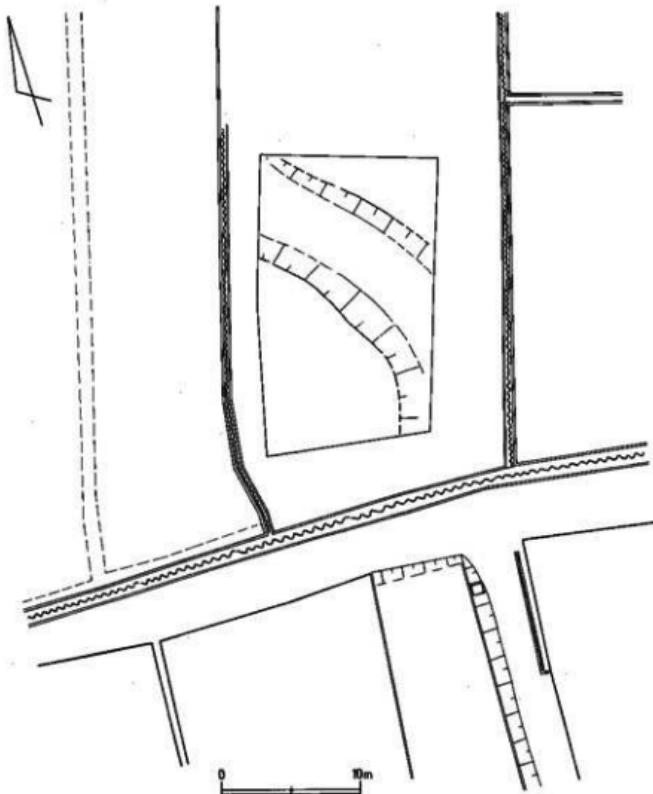


第17図 土層断面図

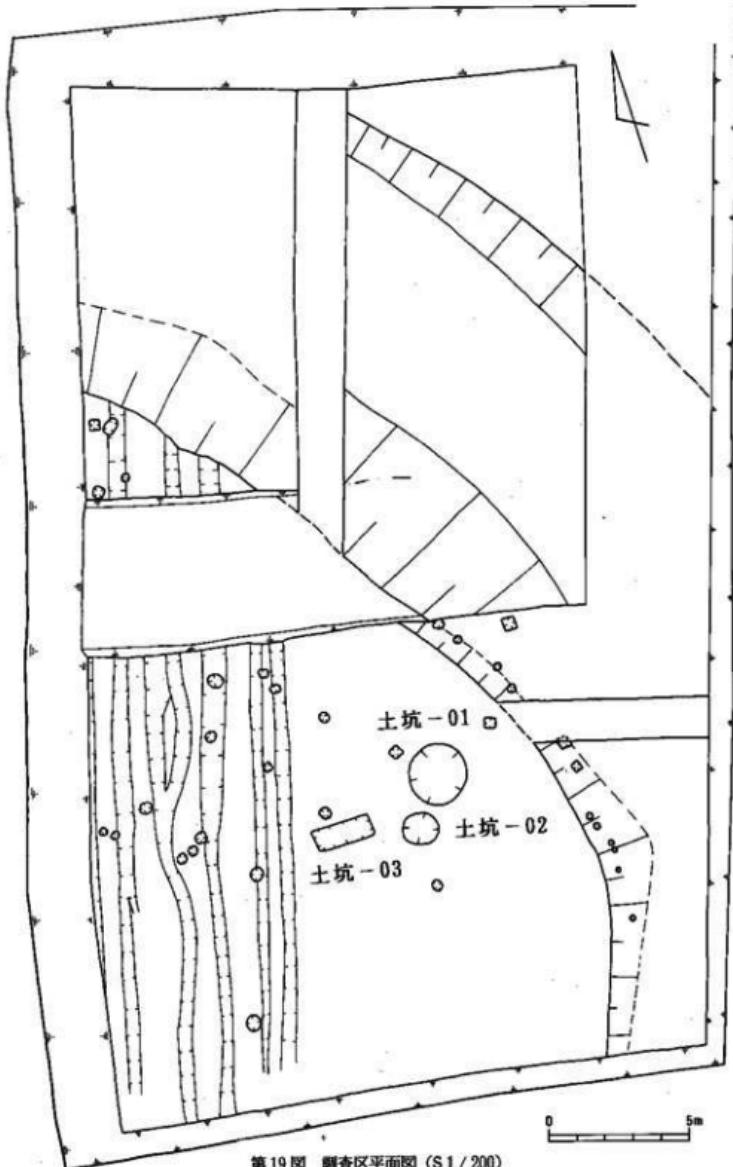
色土層（図17-5）や茶灰色土層（図17-6）が厚く堆積していた。

調査地点には南北に延びるいわゆる素掘り溝造構があり、調査区の南半部では基盤層の上面で検出され、北半部では茶色包含層の上面から検出される。素掘りの溝の時期は不明だが、中近世の造構と推測される。

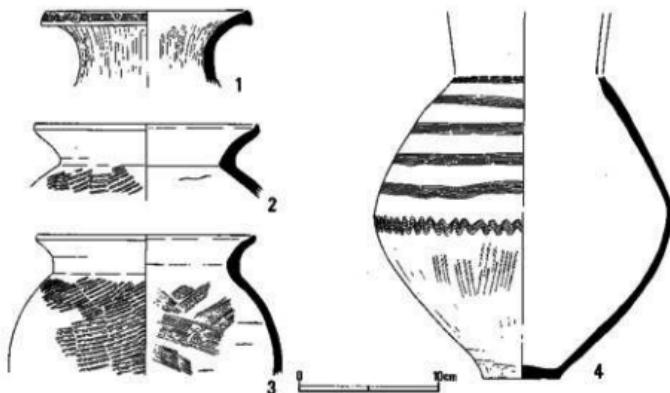
(3)造構と出土遺物



第18図 調査区位置図 (S1/400)



第19圖 調査區平面圖 (S1 / 200)

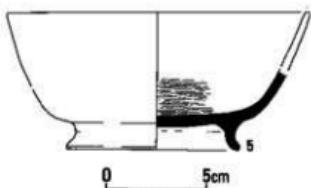


第20図 出土土器実測図 (S1/4) 1~3. 落ち込み下層、4. 土坑・02

落ち込み（古墳の周濠）：調査区の南東から北西に向かって弧を描くように大溝状の落ち込みを検出している。部分的に掘下げを行って落ち込みの内部を調査した所、検出幅7~8m、検出した深さ1.3~1.5mある。落ち込みの内部は大きく茶色系の土壤を中心とする上層（図17-5~7）と粘土層（図17-8~16）を中心とする下層とに大別でき、上層の茶色土層（図17-5）から長寺に関係する奈良時代の瓦片が多数出土し、他に黒色土器B類の土器片がわずかに混じる。また下層では、タタキを施した壺（図20-2・3）の破片や壺（図20-1）の口縁などの器形がわかる土器の資料がわずかに出土している。特に壺は、体部の張りが強く口縁端部を面取り形成している特徴から弥生時代後半（大和第VI-3・4様式）から庄内併行期頃にかけての土器と考えられる。よって落ち込みが弥生時代の後期の末頃から平安時代にかけて存在していたものと推測される。特に下層の粘土層中にはおびただしい自然木や種子類が出土し、加工木も1点出土している。加工木の用途は不明。

調査当初は落ち込みの規模が大きく、地形に伴う自然流路の可能性を考えていた。しかし落ち込みの内部に砂層の堆積が少なく、床面が平らになっている点から人為的な掘削によってできた大溝である可能性が強い。とくに落ち込みのプランが弧を描くように曲がりながら伸びている点から古墳の周濠とも考えられる。落ち込みの下層には、弥生時代後半から古墳時代始め頃の土器が出土しており、これが古墳の周濠であった場合、時期的にかなり古い古墳となる。しかもプランの湾曲状況から径40~50mに達する規模の大型古墳（円墳）になる。いずれにしても周辺の調査から古墳かどうか再度検証が必要である。

土坑-01：径1.5m、検出した深さ0.45mの円形プランの土坑である。出土遺物はない。時期不明だが隣接



第21図 落ち込み上層出土の黒色土器

する弥生時代の土坑-02と比べて土壌の質が異なっている。遺構の性格はわからない。

土坑-02：径1.2m、検出した深さ0.4mの土坑で、土坑の底面から弥生時代中期（大和第三様式）の壺洞部が1点出土している。遺構の性格は不明。

土坑-03：一辺1.5×0.7m、検出した深さ0.2m程の浅い長方形の土坑である。土坑内から弥生時代中期の土器片が出土している。削平が激しく遺構の性格は不明。

建物跡：調査区の中央付近で2間×2間の掘立柱跡を検出している。柱跡はさらに東側へ延びている可能性があり、建物の規模は大きくなることも考えられる。柱穴は2~3mの間隔で並び、やがてプランを持つ建物である。柱穴の大きさは径10~20cm、検出した深さは10cm程で耕作によって削平を受けているため浅くなっている。柱穴は素掘り溝に切られており、切り合い関係では素掘り溝より古い遺構である。出土遺物がないため具体的に示せないが、付近の包含層から黒色土器などの破片が出土していることから中世以前と思われる。

3まとめ

第4次調査では、弥生時代後期末頃から平安時代にかけての落ち込みと建物跡1棟を検出した。

落ち込みは人工的に掘り込まれた大溝とも考えられ、古墳の周濠の可能性がある。古墳であった場合、弥生時代後期末から庄内期頃に当たる土器片が周濠の下層から出土しており、かなり古い時期の古墳になる。この地域の東方には、東大寺山古墳群があり古墳時代前期の大型古墳地帯が存在しているだけに興味深い問題と言える。落ち込みが古墳かどうか今後の調査成果から確実な判断を下したい。

ところで調査地の東側に所在する第1次調査地点では、奈良時代の大規模な建物跡が検出されている。それに隣接する第4次調査地点では、落ち込みの上層部でコンテナー箱分の古瓦の破片が出土しているが、奈良時代の遺構はなかった。第4次調査地点が長寺の中心部に近接しているだけに寺跡のどのような地点を調査したのか、今後の調査成果を含めてさらに検討が必要であろう。

註1 泉武「長寺遺跡（第2次）」「天理市埋蔵文化財調査概報 1986」天理市教育委員会

註2 泉武「長寺遺跡」「奈良県遺跡調査概報 1980」奈良県権原考古学研究所編

註3 昭和63年度に宅地造成に伴う事前調査を天理市教育委員会でおこなっている。



調査前全景（南から）



第1トレンチ全景
(北から)



第1トレンチ南壁
(北から)

図版二
三軒塚古墳 (1)



第2トレンチ西端
(西から)



第2トレンチ西端
(西から)



第3トレンチ東端
(西から)

図版三 三軒塚古墳 (三)



調査風景



調査風景

図版四 西ノ山古墳・成願寺遺跡（一）



西ノ山古墳周辺航空写真

図版五 西ノ山古墳・成願寺遺跡(二)

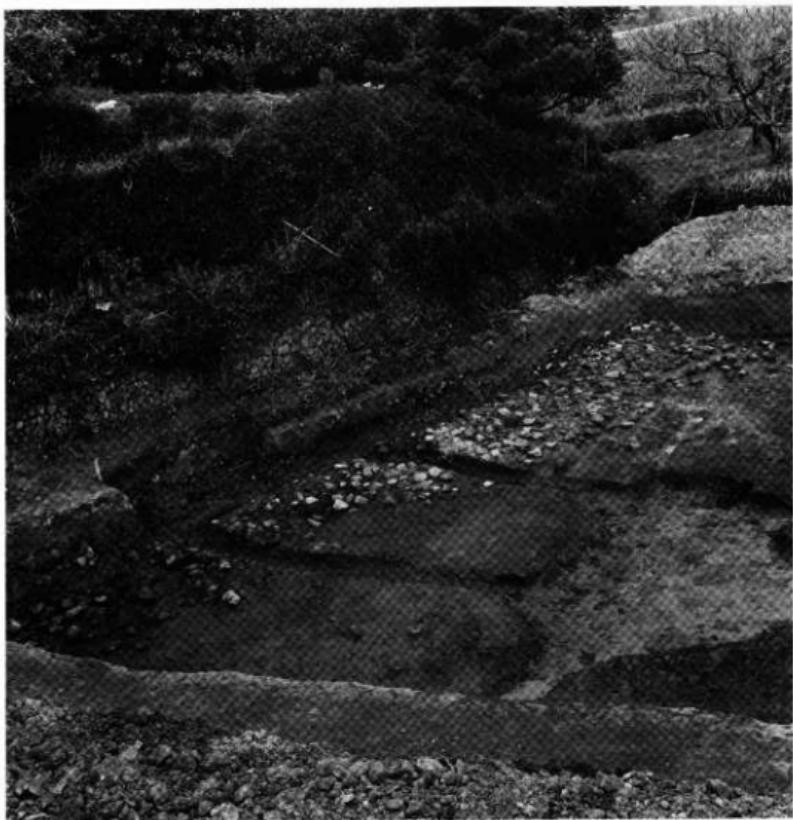


西ノ山古墳航空写真

図版六 西ノ山古墳・成願寺遺跡(三)



調査区全景航空写真



葺石部分全景（西南から）

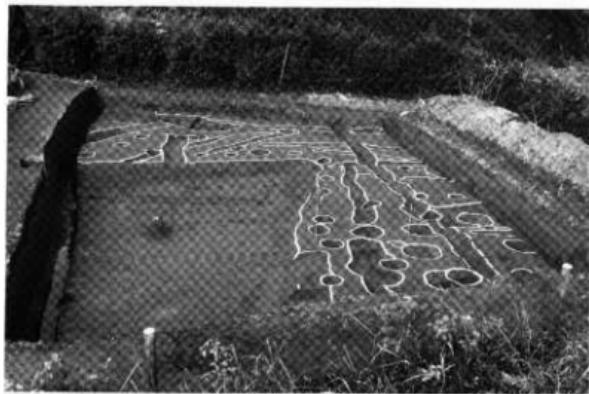
図版八 西ノ山古墳・成願寺遺跡(五)



調査前全景（北から）



上層造構全景（北から）

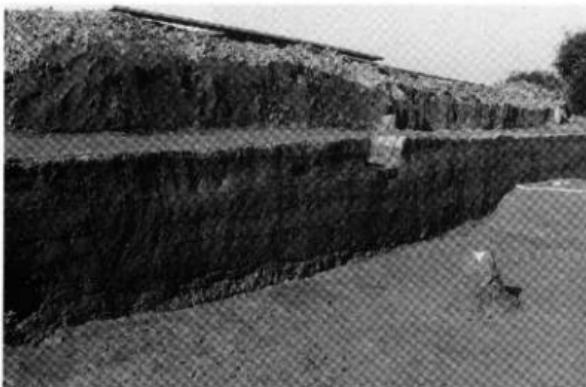


上層造構全景（南から）

図版九 西ノ山古墳・成願寺遺跡（六）



西拡張区上層造構
全景（南から）



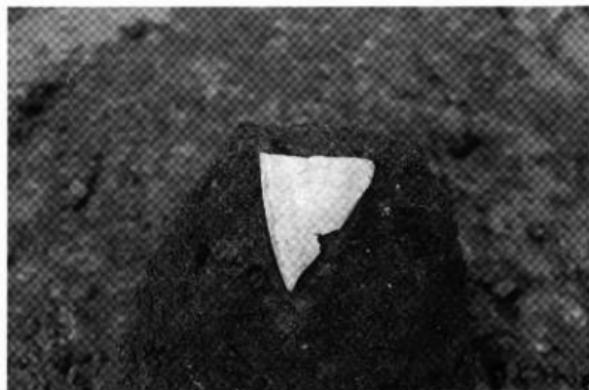
調査区西壁中央
土層断面（南東から）



調査区西壁北端
土層断面（南東から）



SX-01 全景（北西から）



青磁碗出土状況①



青磁碗出土状況②



柱穴断ち割り状況



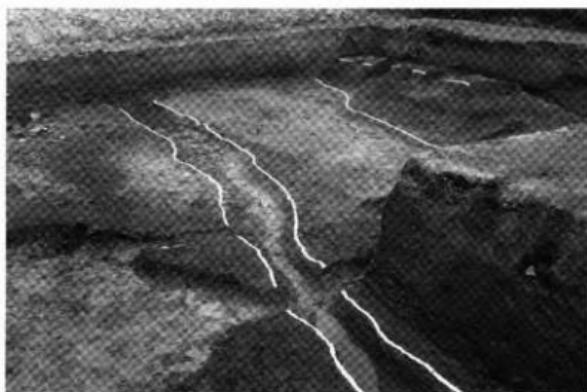
葺石および周濠全景
(南から)



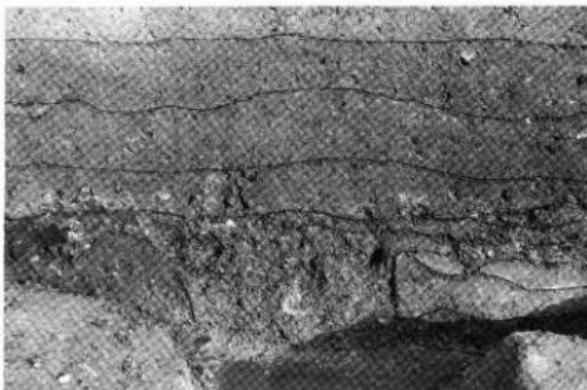
葺石および周濠内小
溝検出状況(南から)



葺石検出状況
(西から)



周濠内小溝検出状況
(南から)

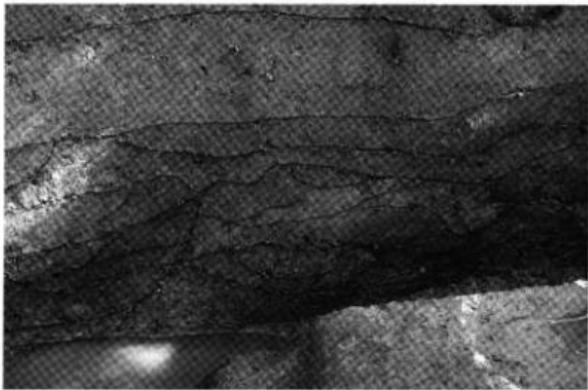


調査区西壁周濠内
小溝堆積状況 (東から)

圖版十三 西ノ山古墳・成願寺遺跡(十)



外堤検出状況（西から）

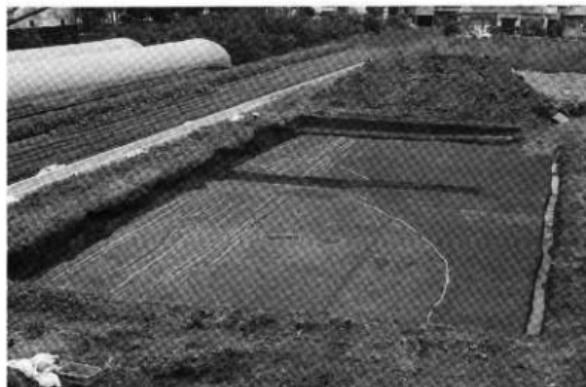


調査区東壁外提
積み上げ状況（西から）



石上面須恵器建
出土状況

図版十四 長寺遺跡〔第4次〕(一)



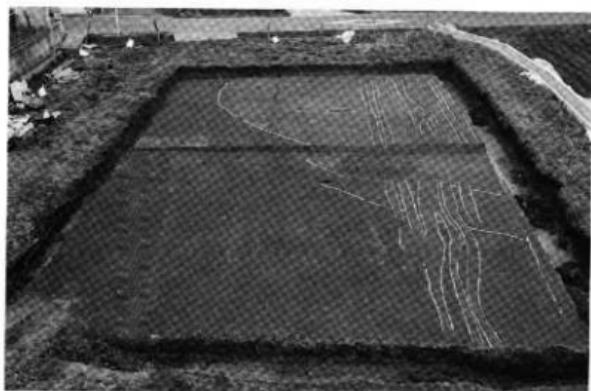
調査区全景（南から）
遺構検出状況



調査区全景（南から）
掘り下げ後



落ち込み全景（南から）



調査区全景（北から）
造構検出状況



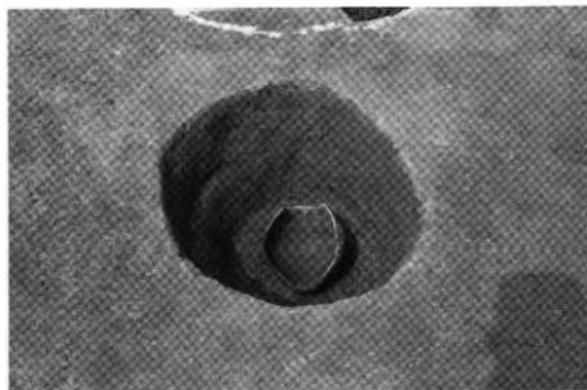
調査区全景（北から）
掘り下げ後



落ち込み下層の
自然木出土状況



建物跡（北東から）



土坑-02



落ち込み断面図

平成3年3月31日発行

天理市埋蔵文化財発掘調査概要報告 1990年度

発行
編集 天理市教育委員会
天理市川原城町605番地

印刷 天理時報社
天理市福葉町80番地